

企業名： 日本ゼオン株式会社

レポート名： 統合報告書 2024

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

日本ゼオン価値創造の歴史から、価値創造フローまで明記されており、どの様な技術や製品を世の中に提供してきたのかが良く分かる内容となっていた。また、中期経営計画の意図や計画の進行状況についても詳細に述べられており、ステークホルダーに寄り添いながら、より良い会社を作っていこうという意思が良く伝わる内容となっていた。特に、「ステークホルダー・エンゲージメント」では、顧客や仕入れ先、株主だけでなく、地域社会にも貢献しようとする姿勢を感じ取ることが出来て、これからも地域社会に製品を提供だけでなく、直接的に関わる企業文化の良さが垣間見えた。

また、日本ゼオンの将来の姿としては、持続可能性と技術革新を両立させたリーダー企業としての地位を確立し、環境に配慮しながらも競争力を持つ企業へと成長する姿だと考えた。

具体的には、日本ゼオンはカーボンニュートラルを目指し、循環型経済を推進することで、環境負荷を減らしつつ、効率的で持続可能な生産を実現することが期待出来る。研究開発の強化によって環境に優しい製品を提供し、他社との差別化を図ることで、新しい市場ニーズに応え続ける柔軟性を持つ企業になっていく。加えて、外部パートナーとの協力や国際基準への積極的に参加することにより、グローバル環境での影響力も高まると考えられる。

社会的価値を創出しながらも、経済的利益を維持・拡大するバランスの取れたビジネスモデルを形成し、結果として、持続可能な経済発展に貢献し、信頼されるグローバルなプレイヤーとしての地位より強固にしてくれると感じた。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

先述した通り、日本ゼオンの価値創造について詳細に述べられていたため、どの様に製品を世の中に提供してきたのかをよく理解できる。その結果、現在日本ゼオンにどのような技術やノウハウが蓄積されているかを我々が知ることが出来る。過去を知っていることで、日本ゼオンにどのような競争優位性が存在しているのか、また、潜在的可能性について我々が考察することが出来る。現状の競争優位性については、事業戦略を始め、分野毎に説明されている。合成ゴムを扱うエラストマー素材事業が安定的に業績を上げているうえ、化成品事業・電池材料事業・高機能樹脂事業などと非常に高い技術を要する製品が多いことも注目すべきことである。総括すると、日本ゼオンは環境に優しい製品の開発に力を入れ、革新的な技術を積極的に活用している。これにより、他社が簡単に模倣できない製品やサービスを提供し、競争市場での差別化を図っていると考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

結論から先に述べると、「持続性が高い」と考えることが出来る。私が考える理由は主に3点ある。1点目は、持続可能性が高い製品・素材を作っていること。2点目は、生産プロセスを最適化することで、更なる成長余地があること。3点目は、グローバルな市場での影響力を向上させていることである。

始めに、1点目についてである。近年SDGsが製品の評価に大きな影響を与えている。会社の社会的評価も、持続可能性が非常に大きなウエイトを占めるようになってきている。サステナブルな製品が次々とリリースされている中、日本ゼオンが扱う素材や製品は、市場が縮小している一部製品を除き、サステナブル製品に必要とされる製品が多くある。製品需要が変革していく時代にあるものの、サステナブルを推進する研究開発に力を入れて行っている。競争優位性を維持し続けるためには、研究開発により新たな製品を作ることが肝であると考えられる。次に、2点目についてである。データ分析による生産プロセスの効率化を行うことで、コスト削減と生産性向上を達成する余地がある。これにより、競争力のある価格で高品質な製品を市場に提供できる体制を確立するだろう。日本ゼオンが掲げているスマート工場化は、特にこれらの事について触れられている。3点目は、グローバル市場についての言及である。国際的イニシアチブへのコミットメントに、近年急速に取り組んでいる。国際的認知度を高めることで、更なる企業価値の向上を図ることが出来ている。

これら3点から、持続性が高いと考えることが出来る。課題としては、環境問題に取り組み、社会の新しく生まれるニーズに柔軟に対応することだと考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

日本ゼオンの成長性と、人材戦略という2点から判断したいと考える。成長性に関しては、先述したように、健全な財務基盤と技術があるため見込むことは出来るが、更なる投資を行い、事業を興す取り組みがあると尚良いのではないかと考える。次に、人材戦略についてである。日本ゼオンが求める人材は、「高い目標に向かって、自ら考え抜いて行動し、替え続けられる人材」である。そうした人材を確保するために「従業員一人ひとりの能力を引き出し、育成し、活用する」組織を作っていると述べている。そのために、日本ゼオンは5つの策を挙げている。日本ゼオンならではの取り組みとして、DI&Bプロジェクトが挙げられる。心理的安全性の高い組織風土づくりは、社員の能力を発揮する上で最も大切な要素のひとつであると私は考える。心理的安全性についての基本教育が行われていることは、非常に魅力的な職場環境であると言える。また、人材教育については、歴史のある財務基盤がしっかりした大企業だけあり、非常に充実した制度がそろっており、リモートワークや育休にも適応した制度が多くそろっていると考えることが出来る。これらの要素から、学生目線からも非常に魅力的な会社であると考えられる。

総評としては、私個人の意見では、自身の人的資本を日本ゼオンで働くことで向上させることが出来ると考えている。貴社の安定した財務基盤、日本だけでなく海外でも活躍する場

があること、何より社会貢献性が非常に高い仕事に取り組むことが出来ること。これらは私にとって非常に魅力的である。日本ゼオンで自身がなりたい姿を見つけ、その姿に向かって成長する環境が整っている。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

私が考える、日本ゼオンの統合報告書の優れている点を述べる。まず、戦略とビジョンが明確に示されていて、中長期的な成長に向けた取り組みが分かりやすかったことである。また、財務情報だけでなく、非財務情報（ESG 関連や社会貢献活動など）も統合的に報告されているため、企業全体の姿を把握しやすかった。デザイン面でも、視覚的に引きつけるレイアウトが施され、重要な情報が一目で分かるようになっていた。加えて、ステークホルダーとの対話を重視していることが良く伝わってきて、そのプロセスや結果が文章に反映されている点も特徴的であった。そして、業界特有のリスクや市場機会に対する認識が明確に示されており、競争優位性を保つための戦略が分かりやすく説明されていると感じた。これらの要素が、日本ゼオンの統合報告書の優れたところだと私は考える。

改善余地として私が考えることを述べる。それは、1つの議題に対し、多くの文字を割いて詳細に説明しているのだが、要約が少なく感じたことだ。Q 津尾議題を知ることに對しての読み始めの障壁が高く、多くの方に見てもらい、知ってもらいためには、もう少し各節に要約を導入しても良いのではないかと感じた。

これらの文章は、日本ゼオンの統合報告書（2024）を参考にしている。

日本ゼオン統合報告書 2024年 <https://www.zeon.co.jp/ir/library/pdf/240930.pdf>